



普天間基地問題から問われるもの

NHK総合テレビ6月5日

『追跡AからZ』という番組が放映された。「管新政権発足へ、信頼回復はできるのか」というテーマ設定で、多くのコミュニケーションターが参加し、それぞれの立場からの発言がなされた。やはり主題は「普天間問題」、番組の構成が「追跡」となっていただけに、これまでの報道とは異なる切り口であったと思う。

普天間基地の移転問題が浮上したのは1996年、自民党・橋本内閣の時である。少女暴行事件を契機に広まる基地撤去の運動の中、移転の約束が交わさ

れた。「基地の条件付き返還」というもので、移転先として海外移転も取りざたされたがすぐに消去され、沖縄北東部ということで交渉が始まる。使用期間は15年という期限付き、「五〇七年で普天間の全面返還をめざす」というものであった。

96年の代替え案が提示されてから14年間、沖縄の県民は徹底的に振り回されてきた。年末に出された1500メートルのヘリポートを作る案でキャンプシュワブの地名が浮上。住民の怒りは「住民投票」という形となり過半数の住民が反対。それ

を受け比嘉市長は辞任と同時に橋本総理に受け入れを表明。国は97年「最終報告書」を出した。反対の立場を取っていた太田知事は98年の知事選で敗北、稲嶺新知事は容認。その後も「辺野古の海を荒らすな」などの様々な反対運動が繰り返されるが、政権交代直前の09年5月「在日米軍再編の中核」という位置づけで国会承認がなされている。

問題でもある」と結んだ言葉が耳に残る。

慈しみの心を失い
力で相手を威嚇すれば
安全保障は崩れ去る
スマナサーラ長老

日本国憲法 第9条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

私が、沖縄問題を直接耳にしたのは91年のことでした。「国土の60パーセントの土地に74パーセントの基地があることは、差別だ」とキャン・幸雄というロックミュージシャンから聞いたのです。91年、大分の文化会館大ホールで「キャン・マリ」のコンサートを企画、演奏の前に私が聞き手のかたちで彼が「差別だ」と訴えたのです。でも私の中でその言葉が生き続けてきたのかと言えば、決してそうだとは言えません。何度も繰り返される米兵による事件の記事を読んでも「怒り」にはならないのです。沖縄の問題として切り離してしまうのです。それが差別なのでありましょう。そういう意味では、鳩山首相の「県外移設」ということは大きな問題提起でもあったと…。

日野詢城

「高橋哲哉氏講演にむけて」

日本アライアンス教団大分キリスト教会牧師 永井一匡

一、ニュース、新聞ではわからない問題の本質を伝える論客

しかし、難しいことをわかりやすく伝えることができるのは、相当賢い人でないとき

前回、宗教者九条の会・大分で、高橋氏をお呼びしたのは二〇〇七年の五月十三日でした。それは、自民党安部政権下で、国民投票法が同年五月十八日に公布される直前のことでした。そして、三年後の今年五月十八日、同法は施行されました。普天間問題の陰に隠れ、世間では大きく取り上げられていませんが、場合によっては、九条を変えることができる状態となったのです。

さを持ち合わせた現代の論客のうちの一人です。前回の講演会に来られた方は皆さんうなずかれることと思います。そうした中、今回、高橋氏

には、「沖繩の歴史と憲法九条」というテーマで、ご講演いただきます。高橋氏は、昨今、全国の九条の会などの講演で、沖繩問題を、根本的なところから論じておられます。今、最も注目のこの問題を切り口に、平和問題の本質をぜひ伝えていただきたいと思

います。二、沖繩問題 政治上の問題

こうした今、もう一度、高橋氏をお呼びし、ニュースや新聞では明らかにされない問題の本質をぜひ伝えて欲しいというのが私たちの願いです。

難しいことを難しく伝えるのは、誰にでもできること。

普天間基地代替施設移設問題では、どうしても、日米同

盟のあり方が問われます。民主党鳩山政権から、菅政権へ。その大きな原因は、七月の参議院選挙対策でした。国民の内閣支持率の低さゆえです。

三、沖繩問題 国民の意識の問題

なりません。

その内閣の低支持率の最も大きな要因は、普天間基地代替施設移設問題です。「国外へ、少なくとも県外へ」その発言に根拠がなく、発言の責任を果たす意思がなかったことが明らかになった失望です。代替施設を沖繩から離れた国外、県外に移すためには、日米で結ばれている安全保障上の協定を改定しなければなら

しかし、ここで、国民の側の意識も問われると思えます。県外に賛成といつても、自分の県に来るのは困る。多くの国民がそう思います。そこで問題なのは、それは、どうしてもつくらなければならぬものを責任転嫁しているのか、それとも、そもそもつくるべきものではないのか、ということ。究極の選択として、移設が避けられないのなら、その時は、沖繩だけを苦しめるわけにはいかないと考えるべきでしょう。それでも、自分のところはいいや、現時点では、少なくとも、必要論を問うべきです。できれば、在日米軍基地は、すべて無い方がいい。そういう意見もあります。また、それはさすがに、実効性が低い。せめて縮小を検討すべき。そういう意見もあるでしょう。この点があつと論議されなければ

四、国民の意識の問題 国際的な紛争

そうした中、三月に韓国の哨戒艦が、沈没される事件があり、五月それが北朝鮮の魚雷攻撃によるものだと、韓国が発表しました。東アジアにおいて、また、紛争が起きるかもしれない。そのような緊張感を持った方も多くおられたことでしょう。そうした時、それでも、在日米軍はいらない、縮小せよ、そうした声を上げていけるかが問われます。

困難になったと言。協定を変える気がないというわけですから。「国外、少なくとも県外」この発言に何の根拠もなく、言った責任を取るつもりもないということに対する失望は沖繩の県民だけではありませんでした。

国際状況から考えて、九条はふさわしくない。国際的な責任を取れるためにも、紛争解決のために、軍事行動できるように九条を改定すべき。こうした議論は、国際紛争が起きるたびに問われることです。確かに、外国で、紛争が起きた時、日本が、あくまで、軍事行動による協力をしないならば、それを、胸を張って

言える根拠を持たなければなりません。そうでないと、お金だけ出して、いのちの危険のあることは他国にさせる卑怯な国という批判の欺瞞に負けてしまいます。その場合で言えば、軍事行動にまざる、平和回復、平和維持のためにできることを示さなければなりません。

五、国民の意識の問題

日本の防衛

また、仮に、他国が、日本に軍事介入してきたらどうするのか。北朝鮮がミサイル攻撃してくる可能性などを考える人もいます。その時、米軍の協力を、現在のように得られない事態をどう考えるかです。

これは、これまでの日本の平和状態が何によったのかという認識にもよります。アメリカの核の傘の下にいたから。これからもそうすべきだ。そういう意見もあるでしょう。しかし、これからは、自

国の平和は自国で守るべきという意見もあります。それがどうであれ、日本の防衛力は問われるべきものだという声は強くあります。これらの点も考えなければなりません。



六、信じることを安心して言える本物の平和づくり

沖縄の問題、国際紛争の問題、日本の防衛の問題、いずれにしても、具体的な学び、思索、決断が必要となります。宗教者九条の会・大分の学習会や講演会が、そのことに役立つものとなればと思います。

しかし、それが、ただの情報だけに終わらないようにと、私たちは思います。安全、平和を脅かすものに対し

て私たちはどう対処したらよいか。安全平和をもたらすためにどうしたらよいか。根本的な平和観、人生観が問われます。

前号で、当会世話人の佐々木師が、キリスト教メノナイト派の平和に対する考え方を示されました。こうした主張が、さらに、キリスト教、仏教などそれぞれの立場でなされていくべきだと思います。

「それぞれの神学を出しだしたらもめてしまうからそこにはふれずに・・・」そういう考えは、うまくいっている時は尊重となりますが、紛争の芽でもあります。自分が信じているものを安心して出せること、他人のそれを聞くこと、お互いにそのことについて話し合えること。それが本物の平和づくりです。

七、キリスト教における平和

私の立場も、同じキリスト者として、「殺してはいけない」「あなたを迫害する者を

愛しなさい」という聖書の教えに基づき、徹底的な非戦という立場であることは同じです。

しかし、キリスト教はみなそうかというところではありません。ローマ帝国の国教となつて、国の戦争を肯定して以来、それはそうでなくなつてしまいました。

その反省に立つて、キリスト教的な徹底的非戦を主張するグループ、また、以前からそれを主張するグループもあります。また、それとは別に、それを極端な理想論とし、単純に受け入れることはしないものの、現実生活にどう反映できるかを模索するグループもあります。また、平和問題、紛争解決問題を、現実的対応に重きを置きつつできる限りそれを信仰的に進めたいとするグループもあります。それぞれが、信仰的に何を根拠とし、現実問題として何を問題としているのか、ぜひまた機会を得て報告させていただき、皆さんのご意見も伺いた

いと思います。

そこで問われるのは、死生観の問題です。キリスト者には、死後の救いの確証があるのですから、現世のいのち、安全にむやみにしがみつかず、非戦に徹するのが本来ではあると思います。これは殉教の問題にも関係します。

高橋氏も、キリスト者、また、宗教者の、平和集会、雑誌などで、哲学者の立場から、宗教者の平和論、特にその殉教という点で、興味深い発言をされており、今回の講演会でも、チャンスがあれば質問の時間にも聞くことができたらと思っています。

八、宗教者の会の平和づくり

ところで、「自分が信じているものを安心して出せること、他人のそれを聞くこと、お互いにそのことについて話し合えること。」それは、国際問題とか、政治社会問題、宗教問題だけのことでなく、地域、職場、学校、家庭

の中での安全、平和の問題と同じです。

一般の平和運動、その運動団体で欠落しがちなのはそこです。平和を訴える人の家庭が平和でない。平和を求める活動において、大義名分のためには手段を選ばない。それでは意味がありません。

しかし、それは、自分の足元だけ見ていればそれでいいということでもなく、足元にも目を向けつつ、平和を失い苦しむ人のためにも動くということ、動きつつも、自分の足元についても誠実であるということです。

私は信仰者、信仰の導き手として未熟な者で、足元の平和づくりがまだまだ課題な者です。しかし、当会の世話人の皆さんは、宗教者として、そうした誠実さに生きておられ、多くのことを学ばせていただいています。

ぜひ、多くの皆さんに、まず、この度の、高橋哲哉氏の講演会に御出席いただき、見えにくい問題の本質を得て欲しいと思います。そして、ぜひ、学習会にも出席いただき、平和の問題を、生き方全体のこととして一緒に考えていけたらと願います。

スマナサーラ長老の講演会から 安全保障のことをどう考えるのか

5月17日、日出町の正覚寺でアルボムツレ・スマナサーラ長老の超宗派仏教研修会が開かれました。基調講演を午前10時から、午後は「大宗会」代表の掬月誓成住職の司会で質疑を。「仏教本来の姿を根本から問い、日本仏教のこれからを考える」というものでした。参加者は150名程で御堂が一杯に、若い人たちの参加も少なくなかった。全体像をお知らせできないのは残念ですが、紙面の都合もあり、「今、日本国内では、米軍の普天間基地の移転問題ということが大きな問題として取り上げられているのですが、それに関して、仏教徒が考える安全保障ということについて先生のお考えを聞かせて頂ければと思います」という質問についてお話し下さった部分をご紹介します。

(文責・詢)

※ ひとを蔑んだりしない

本当は政治的なことはしゃべってはいけないと言ふことになっていきます。でも、たとえ話として政治の話が出ることもありますので、何もしゃべらないと言ふことではありません。仏教という教えから見れば安全保障というのは成り立たないのです。仏教が教えるのは一人一人が他人をバカにすること、差別すること、虐めること、他人を攻撃すること、そういうことを止めなくすこと。そういうことがなければ安全保障は成り立たない。私が迷惑をかけることがなければ、私に迷惑をかけるということもなくなる。たとえ相手が不機嫌であっても「こんにちは」と声をかけると少し気持ちや和らぐ。だから

一人一人の心の中にある攻撃の心が消えて慈しみの心が入ること。町の安全・社会の安全・国の安全ということもあります。それを考えるのはそれぞれの行政の責任でありましょうが、それはそううまくいかないのです。特に権力者というのはけつこうわがままなんです。たとえ民主主義だと言つても権力を握つたと言ふことは、結果として、自分のことを考えて行動することが起きるわけです。人の心の中にある怒りと欲が露わになるといいますか、そういうことが起こるわけです。だから根本は一人一人の心の問題であります。ただ現実には人を脅す、力で相手を脅かすことで安全を確保しようということがなされています。原子爆弾をいっばい作つて、凄い武器を沢山持つて威嚇する。それが平和であるという。今の基地問題とかもそういうことでありましょう。基地があることで安全が保障さ

れるという、そういう考え方は逆です。でも本当は逆です。だから嫌われ、狙われているということなのです。

※ 威嚇すれば安全は保障
されない

たとえば攻撃をしたいと思うのはスーパで買い物をして子どもと手を繋いで歩いているお母さんですか？それともイカつい格好をして武器を持って歩いている人ですかということになります。本当は軍隊をなくすことが一番国の安全保障と云うことになるのでしようが、それでは格好がわるいなどと思えば、おしやれで軍隊を持つくらいで良いのだと思います。軍人も国民のために仕事をする人々、もしどこかの国が攻撃してくるとすればそれに立ち向かうということになるのでしようが、基本的には武器を持たないことが安全の基本だといえます。

核の抑止論というもの

があります、人を威嚇し脅して安全というのはどうかなあと思います。弱みが見えちゃうのです。皆様はコブラという猛毒を持った蛇のことは知っていますかね？噛まれたら死にます。でもコブラは攻撃的ではないのです。でも威嚇をするのです。頭をもたげて喉のあたりを広げてコブラだと威嚇をするのです。そうすると我々は気をつけますが、それがコブラの弱みでもあるわけです。攻撃態勢を取る傘を広げて攻撃態勢を取ると視界がもの凄く狭くなる。私のスリランカのお寺にでつかいコブラが棲んでいるみたいですけども、そこを住み処としてるので権利がありますので追い立てることはしていません。でもいつの間にか小さいな子どもを沢山生んでいたんです。小つちやな赤ちゃんのコブラがお寺の前に現れて、たまたまいた日本若人がそれを見て騒ぎ出したのですが、私はコ

ブラの赤ちゃんをそつと見えないようにしてその場を繕ったのですが、怖がつても困るので、カラスの話をしました。カラスが襲おうとすると傘を広げてそれに対抗する。攻撃する相手だけを見るために視野が極端に狭くなる。カラスはそれを知っていて前から誘ってサツと後ろから捕る。



威嚇をすると同時に弱みを出している。たとえばアメリカは世界一の軍事大国ですけども勝っているのは誰ですか？そんなに良い方法ではないのです。平和

にしたければ凶暴な軍隊はいりません。国も政府がチャントやれば暴動は起こりませんが、タイのようなことでもあります。政治が悪いと言うことでしょう。大分県では反対運動がありますが、反対する人が悪いのではなく管理する人が悪いのでしよう。国民が悪いのではなく管理する側に問題がある、でも国民が管理する側を作り出している。だから力による“安全保障”なんてこと忘れてしまった方が良くないかと思えます。どこまでいっても平行線なんです。本当に安全な国を造るためには一人一人が平和主義で交流が好きで開放的であるということが大切になります。仲良くする。そこに平和の原則があります。威嚇をするようなことはいない。包丁だけでも自分の安全のために持つようになると自分の安全はなくなります。包丁を持つことでやられる権利を持つことにならる。アメリカのテロ事件と

いう事がありますが、それは買ったんです。無茶苦茶他の国を侮辱し人間扱いをしない、そういうことがあつてテロ事件が起こった。アメリカを攻撃してアメリカが変わるわけではないのですが、アメリカの傲慢さを何とかしたいとやってみました。どちらも間違いなんです。ペンタゴンをたたいて何とかしようとしても何ともならない。象徴的に世界の軍事の象徴を攻撃する。テロリストから見ると“やっただろう”ということでしょうがその付けがまた返ってくる。どこまでそんなことを繰り返しても平和はやってこない。他国の軍隊に守って欲しいということを止めた方が良く。他国の軍隊に守って貰うというのは相当にヤバイ。そういうことがなくなれば北朝鮮のいい加減な脅しもなくなると思えます。自国の軍隊もあまりに強化されれば周りに嫌われてしまいますし、他国と組んでということになると

なおさら危ないのです。だから安全保障として自分を危機にさらすというのをやっています。どうすればいいのかという答えはないのでしようが、国民がそれを選ぶのでしようが政治家の勝ち、反対する勢力が立ち上がり、暴動を起こしてもタイのような情況は決して良い情況だとは言えません。一人一人が自分の安全をはかったほうがより確かです。仏陀の説く平和は、個人に科せられる。ひとを虐めることはしない、害を与えることはしない。同時に自分に害を与えることもしない。害を受けないように気をつける。個人の態度が一番の中心です。

※ 自分で自分の身を護る

最後になりますが、仏教徒としてどうしますかと言えば、“自分の身を護りなさい”というだけです。アメリカの兵隊さんが飛んでき

て君を守ってくれるという話ありますか？それはできません。自衛隊でもおなじです。誰かの命令で行動を起こすので、私たちを守るためだという勘違いをしないうで下さい。私たち一般市民を守るものは何もない。法律さえも護ってくれませんが。法律も権力者が共謀すれば勝つようになっていくのです。そう思いませんか。国民のためということはあまりないのです。たとえば人気のあるスポーツ選手が何かを起こしたとすると、「子どもたちの夢を壊したから」と厳しく罰せられるが、法律さえも我々を護ってくれるとは言えませんよ。警察でさえ護るためとは言うけれども、護ってしまった人を捕らえにやってくるのです。ストーカーにつけ回されて怖いんだと言っても動かない。殺されてしまったから動き出したのです。市民の訴えにすぐさま応えるということはで

きないのです。事件が起きてからということになりません。予防的措置というのは困難なのです。犯罪者を死刑にしてもあまり効果はないのです。仏教者としては「自分で自分を守りなさい」ということです。

※ 武器では身を護れない
アメリカは武器を持ってはつきり言っているのです。リベラル派のある人は「軍隊はいりません・国民一人一人が武器を持って身を護る・敵を倒せばいいのだ」と、それがアメリカの憲法だと。幾つかの州では武器を持つてはダメだと。あれがダメなんです。一人一人が武器を持って自分を護ろうという人と武器を持たずに国がアメリカ人を護るべきだと言うことがごちゃ混ぜになっている。一人一人が自分を護るといのはアメリカと一緒にすることが仏教の教えです。身

を護るためと言うことでバットを持つて歩くこともヤバイのです。チャンとユニフォームを着ていけば問題はなく平和な姿ですが、そうでなく身を護るためにバットを持ち歩くと言うことになれば、自分で危険な場面に身をさらすことになるわけです。

50年以上も前のことになりましたが、私が学生の頃に隣に体格の良い学生がいました。彼は体力もあり年頃でもあつてか、諸刃のナイフを自慢げにいつも持ち歩きそれをチラつかせる訳です。何でもつて歩くのかと聞いたら「誰かがけんかを売ってきたらタダで済ませられないから」と。そこで「私はあなたのことは怖くないけど、あなたは怖いでしょう」と言いました。それで終わったのですが、仲良くなりました。武器を持つたことで怯えたり、恐れが生まれるのです。そういうことが基本にあるかと思えます。

世話人 (◎代表者)

- 無着成恭 曹洞宗 泉福寺
- 酒迎天信 日本山 妙法寺
- ◎日野詢城 大谷派 見成寺
- 林 正道 大谷派 安養寺
- 西郡 均 本願寺派 誓岸寺
- 古谷 聡 大谷派 蓮照寺
- 佐々木淳二 大分メノナイトキリスト教会
- 掛橋泰定 日蓮宗 妙栄寺
- 大在 紀 本願寺派 長光寺
- 野口春夫 日本基督教団津久見教会
- 永井一匡 アライアンス大分キリスト教会

年会費納入・カンパを
よろしく願います。

宗教者9条の会・大分事務局
〒879-5102
由布市湯布院町川上 3561 見成寺
TEL 0977-84-2257
FAX 0977-84-5203
年会費 3,000円
郵便振替口座 01720-1-111731

第5回 講演会

沖縄の歴史と憲法9条

講師
高橋哲哉さん
東京大学大学院教授・哲学者
著書：『心と戦争』『歴史/修正主義』『靖国問題』

2010年6月26日(土)
13:30-16:00



コンパルホール
大分市府内町1丁目5-38
問合せ 0977-84-2257

講演会終了後
「宗教者9条の会」総会を行います